

## 2 平易で省力的なクリの超低樹高整枝法

### ねらいと成果

クリの低樹高整枝法（せん定後の樹高3.5 m）は、受光態勢を良好にすることで葉量が増加し、高収量と高品質につながる。しかし、せん定作業時には脚立や高枝切り鉋が必要なため、収穫、調整作業に次いで労力を要する。そこで、当センターは高齢者や新規栽培者にも平易で省力的な整枝、せん定法を検討した。

その結果、せん定後の樹高2.5 mの超低樹高整枝法によって、高収量、高品質を維持したまま、せん定作業の平易、省力化が図れることが明らかとなった。

### 内容

三田市の現地園において、1991年に定植された「筑波」を用い、超低樹高整枝区（せん定後の樹高2.5 m）と対照区（低樹高整枝区）を設けた。せん定は、できるだけ平易にするため、①樹冠側方間隔の確保：隣接樹との間隔を地上1.5 mでは1 m以上、2.5 mでは1.6 m以上、3.5 mでは2.1 m以上確保する、②樹高制限：地上2.5 mまたは3.5 mを越える枝を基部から間引く、③側枝の間引き：近接する枝、下垂枝を基部から間引く、④仕上げ：結果母枝、衰弱枝を間引く、の順序により行った（図1）。なお、11年生時からは超低樹高区では①の手順を省き、③

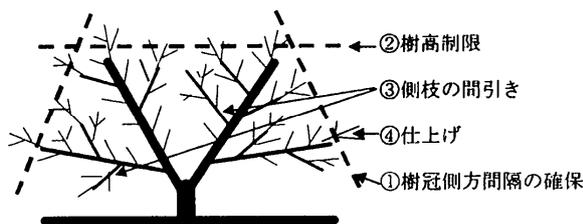


図1 せん定手順

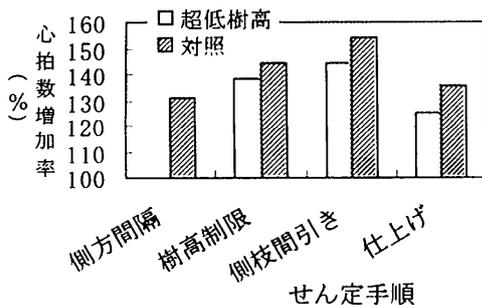


図3 せん定時の心拍数増加率 (13年生時)

の順序により隣接樹との間隔を確保した。

超低樹高区は、地上からのせん定作業が可能となったため、所要時間（10 a 当たり）は平均12時間と対照区と比べて20%程度少なくなり、また作業時の心拍数増加率も5~10%低下した（図2、3）。

生育期の樹高は、超低樹高区が対照区より0.5 m程度低かったが、樹冠占有面積や1樹当たりの結果母枝発生数、その基部径には明らかな差はみられなかった（データ省略）。

処理を開始した7~13年生時の累積収量は、超低樹高区は対照区の87%（11~13年生時の平均は約500kg/10 a）で、また2 L以上の果実割合は両試験区とも平均で85%程度と非常に高かった（図4）。

以上のように、超低樹高整枝法は、低樹高整枝法と比べて収量はやや減少するが、クリのせん定作業の平易、省力化に効果が高いと考えられた。

### 今後の方針

本県の主要品種である「銀寄」等、他の品種での適応性を検討する。

水田 泰徳（農業技セ・園芸部）

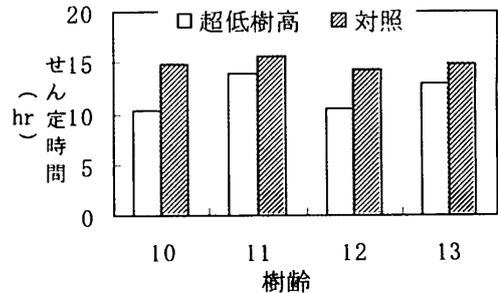


図2 10 a 当たりのせん定時間

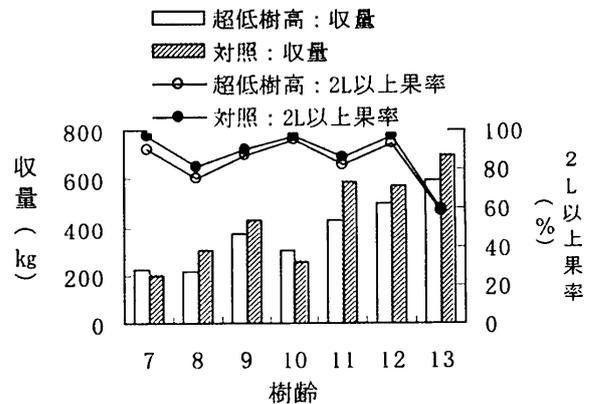


図4 10 a 当たり収量と2L以上果率